

傲慢王子は月夜に愛を囁く

### プロローグ 美酒の代償

天使の分け前。

柳原涼子やなぎはらりょうこがその言葉を知ったのは、まだ小さな子供の頃だった。

ブランデーやウイスキーといった蒸留酒を樽たるで何年も熟成させている間に、酒に含まれる水分やアルコール分が水蒸気となって樽から抜けていき量が減る。その現象を、昔の人は「天使の分け前」や「天使の取り分」と呼んだらしい。そして天使がこっそり飲んだお礼に、お酒を美味おいしくしてくれると考えた。

その話を聞いた幼い涼子は、天使がこっそり欲しがらるほど甘美な存在に憧れを抱いたのだった。

「涼子、なにやってるの？」

琥珀色の液体が入ったグラスを恍惚きょうごの表情で眺めていた涼子は、声のした方に視線を向けた。見ると、友人の國原比奈くにはらひなが、奇妙なものを見る目で自分を見ている。

「なについて……」

見ればわかるでしょと、涼子はブランデーの入ったグラスを揺らす。

「お酒眺めてニヤニヤし過ぎ。遠目に見ても、ちよつと怪しい人だよ」

上目遣いに伝えてくる比奈の手には、細身のシャンパングラスが握られている。

グラスの端に見栄えよくカットされたオレンジが添えられたそれは、おそらくアルコール度数の低いカクテルか、ノンアルコールのジュースだろう。

せつかくめつたにお目にかかれない高級な美酒が並んでいるのに勿体ない。そんなことを思いつつグラスを口に運ぶ涼子は、そのついでといった感じで周囲を見渡す。

会場には華やかに着飾った女性や、会話を楽しむ男性の姿が多く見られる。

今日の涼子は、もう一人の親友である芦田谷寿々花の家が取り仕切るパーティーに参加していた。比率として、年配の男性が少し多いのは、このパーティーを取り仕切る寿々花の父親、あけぼのエネルギー会長の芦田谷廣茂氏が政財界の重鎮だからだろう。

寿々花の話によれば、芦田谷会長は無類のパーティー好きで、適当な理由を作っては華やかなパーティーを開催し、自分の権力や財力を誇示したがるのだそうだ。その結果、政財界のお歴々が多く出席している光景は、さすが芦田谷家といったところだろう。

ではそんなパーティーに、何故一介のOLでしかない涼子が出席しているのかと言えば、「おまけ」の参加である。

新入社員の頃からの親友である比奈が、この春、涼子も勤める世界的な自動車メーカー、クニハラの御曹司で専務の國原昂也と結婚した。

そのため彼女も、芦田谷会長の開くパーティーに専務夫人として招待されることが増えている。

涼子と比奈と寿々花、三人の仲がいいことを知る会長は、比奈と一緒に涼子も招待してくれるのだ。

「おまけ」の身として多少の遠慮はあるものの、普段口にできないような高価なお酒を飲めるまたとない機会なので、酒好きの涼子としてはありがたい限りだ。

「子供の頃に聞いた『天使の分け前』って言葉を思い出していたの」

琥珀色の液体を照明にかざした涼子は、チラリと比奈に視線を向けると、グラスを口元へ運ぶ。すぐにブランデーの持つ芳醇な木の香りが、鼻孔をくすぐる。

その香りに誘われるようにブランデーを一口飲めば、深い味わいの冷えたアルコールが喉を撫でていく。

涼子はグラスを揺らして氷を遊ばせつつ、比奈に「天使の分け前」の意味を説明した。そして、自分なりの見解を添える。

「樽の中いっぱいのお酒が少しも蒸発しないよう苦慮するんじゃなく、天使が飲んだんなら仕方ないと諦めて、お礼にお酒を美味しくしてもらえらるだろうって納得する感じが好きなの。幸せって、独り占めた途端、味気なくなりそうだから」

そんなおおらかさが、美味しいお酒を造る秘訣なのだろう。

「涼子のそういう発想っていいよね」

比奈が涼子を見て嬉しそうに笑う。

「それはどうも」

褒められたのが気恥ずかしくて、涼子は素っ気なく返してお酒を飲む。

立場的には自社重役の奥様になった親友だが、涼子としては、好きな人と大恋愛をしてみたく結婚したにすぎないので、今さら態度を変える気はない。

涼子の反応に小さく笑った比奈がグラスに口を付けた時、会場で拍手が沸き上がった。

何事かと視線を向けると、人だかりの中心にもう一人の親友である寿々花と、彼女の腰に手を回す恋人の鷹尾尚樹の姿がある。

通りかかったウェイターにグラスを返し比奈と人だかりの方へ近付くと、周囲の会話から娘を溺愛していると有名な芦田谷会長が、二人の付き合いを認めたのだと知る。

今日のパーティーの目的は、二人の関係をお披露目するためだったのか。とすると、これは結婚を視野に入れた婚約発表だ。拍手の合間に聞こえてくるそんな囁き声に、涼子と比奈は驚きを隠せなかった。

寿々花から、家族の過剰なまでの愛情の重さを常々聞かされているだけに、そんなスムーズにことが運ぶものだろうかと首をかしげてしまう。

周囲に倣って拍手をしながら芦田谷会長と寿々花の兄たちへ視線を向けると、案の定、憤懣やかたないといった様子で二人を見つめていた。

三人の表情を見れば、この婚約発表が初めから予定されたものではないとわかる。

——鷹尾さんに出し抜かれたかな？

寿々花から聞く尚樹の人となりから、涼子はそんな推測をする。

きつと彼なら、この先も寿々花の家族からの妨害をなんなく乗り越え、今日の婚約発表を現実のものにしてしまうだろう。

そんな未来を想像し惜しみない拍手を送っていると、脇腹を比奈に突かれた。視線を向けると、比奈がニンマリと目を細めて言う。

「涼子の予言どおりになったから、次は涼子の番だね」

「……？」

「ほら、私の結婚式の日に、運命の人を見つけると宣言してたじゃない」

「ああ……」

一瞬なにを言われたかわからなかったが、その言葉で思い出した。

寿々花と尚樹は、比奈の結婚式の日に出会った。たまたま二人の出会いの場に居合わせた涼子は、「次は私たちも、運命の人を見つけようから」と、冗談半分に比奈に宣言したのだった。

寿々花はその後、本当に尚樹と愛を育み今に至るが、涼子の方はこれといった出会いもないまま淡々と日々を過ごしている。

私はその宣言を果たせる日はいつになることやら……

遠い目をして、まだ見ぬ運命の人はどこにいるのだろうかと考えていると、ふと芦田谷家の次男、剛志と目が合った。

寿々花も美人だが、剛志も男性としては際立って整った顔立ちをしている。

それでいて女性的な印象を受けないのは、背が高く男らしい骨格をしていることと、凛々しい眉

や眼差しに隠し切れない我がの強さが表れているからだろう。

さらに言えば、虹彩ニライハシに含まれるメラニンの量が少ないのか、彼の瞳は光の加減でグレーっぽく見える薄い鶯色うらぎいろをしている。

その神秘的な瞳は、彼の美しさを際立たせると共に、獠猛ロウモウな狼と対峙しているようなうつつすらとした恐怖心を相手に与えるのだ。

芦田谷家の人間は強いカリスマ性に溢あふれていると、自社の専務である昂也が話していたが、まったくもってそのとおりだと思う。

「……」

——背が高くしてお金持ちでハンサム……揃いすぎだろう。

だからあんな強気な物言いをしてくるのだらうかと、少し前の出来事を思い出し、涼子は不満げに目を細める。

剛志は涼子のその表情の意味がわからないと言いたげに、微かに首をかしげた。

その所作さえも、ハンサムな彼がやると非常に絵になる。

それがなんとなく気に入らなくて、大人げないとは思いつつ、ネイルで彩いろった指を目の下にあて、あつかんべーをした。そして近くにいたウェイターから新しいグラスを受け取る。

チラリと視線を向ければ、剛志は虚を突かれたのか目を真ん丸くしてこちらを見ていた。その表情にクックッと喉を鳴らし、彼に向かってグラスを軽く掲かげてから飲み干す。

自分を呆然と眺める剛志に、涼子はニカリと挑発的に笑った。

それが後に、どんな惨劇を招くかも知らずに。



「頭痛い……」

掠れた声で唸うなった涼子が薄目を開けると、視界は白く淡い光に包まれていた。

一瞬、飲み過ぎて死んだのかと思ったが、追いかけるようにしてこめかみに脈打つような痛みが走ったので、生きているのだと理解する。

——確実に飲み過ぎた。

今動く吐いてしまいたいそうなので、涼子は布団の中で両の指でこめかみを強く押さえて背中を丸めた。そうしながら、自分がこの状況に陥おちった経緯を思い出す。

昨日は、寿々花の父親が開いたパーティーに出席した。

親友の寿々花は、日本を代表するエネルギー会社である、あけぼのエネルギーの会長の娘だ。

涼子としては、誰の娘であっても関係ないし、気が合えばそれでいいと思っている。ただ、寿々花と友人になったことで、彼女に付き合っあって豪華なパーティーなどに出席する機会が増えたのは思わぬ恵みだった。

桁外れの令嬢である寿々花が出席するパーティーは、当然のごとく会場も料理も主催者のこだわりが半端ない。もちろん出される酒類も素晴らしかった。

中でも昨日のパーティーは、華やかなことが大好きな寿々花の父が主催しただけあって、酒も料理も一級品が揃えられていた。庶民の涼子ではどうも手の出ないお酒が並んでいたこともあって、つい欲求に抗えず飲み過ぎてしまった。

結果、二日酔いで身動きとれずにいると。

嗜み程度にしかお酒を飲まない比奈には、よく「そんなになるまで飲まなくても」と言われるが、涼子には涼子の言い分があるのだ。

——酒は繊細な生き物である。

高価な酒なら誰がどう飲んでも美味いというのは、浅はかな考えだ。

保管方法で大きく味が変わるし、飲む際も提供される温度や一緒に出される料理で酒の印象が違ってくる。

その点、芦田谷家のパーティーは隔々までぬかりがないため、最高の状態で最高品質のお酒を提供してもらえるのだ。

こめかみを揉みながら昨日飲んだお酒の味を思い出し、涼子はホウツと恍惚の息を漏らす。

——珠玉の美酒の代償が、二日酔いなら安いものだ。

それに、ちょうど会社も夏期休暇中なのだから、こうやって一日布団で丸まって過ごしたところで、なにも問題はない。これもまた贅沢な過ごし方だと、しばし布団で丸まっていた涼子は、不意に「んっ？」と、首をかしげた。

いつから自分の寝具は、こんなに肌触りがよくなったのだろう。

——これ、羽毛だよね……

こめかみから手を離し、涼子は自分が包まる寝具に指を滑らせる。もしかしてシルクだろうか。滑らかな手触りのシーツが、火照る体の熱を吸収してくれて心地よい。

「……？」

なにかがおかしい。

自分は今、タオル生地きじの薄い掛け布団を使っているはず。それに色も、こんな繭まゆを連想させる柔らかな白ではない。

ズキズキと脈打つ頭では、上手く考えがまとまらない。

このままでほらちが明かないと、涼子は頭痛を堪えて右腕を大きく動かし、包まっていた寝具から顔を出す。そして、周囲を確認してギョツと目を見開く。

次の瞬間、涼子はバネ仕掛けの玩具のごとく上半身を跳ね起こした。

「いどこっ！」

目をぱちくりさせながら、涼子は改めて周囲を確認する。

寝室にしては広すぎる部屋には、落ち着いたデザインのチェストやソファアといった家具が配置されている。そのどれもが、涼子の記憶にないものだ。

ソファアの前のミニテーブルには、涼子のバッグと一緒にカジュアルブランドの紙袋をはじめとした幾つかの紙袋が置かれている。

今まで心地よく包まっていた寝具は、やはりシルクのカバーが掛けられた薄い羽毛だ。

一瞬、急性アルコール中毒にでもなつて病院に運ばれたのかと思つたが、ベッドは簡素な医療用のそれではなく、重厚感のある木目の美しい品だ。大きさから考えて、キングサイズだろう。

それに、足下の緻密な模様（ちみつ）が織り込まれたフットスローは、見るからに安物でないとわかる。リースのカーテンしかひかれていない窓から見える景色から考えて、ここは高層階らしい。ということとは、芦田谷家の客室でもないということだ。

さらに、よく見れば自分はほぼ裸のような格好をしているではないか。

——酔つた勢いで誰かにお持ち帰りされた？

考えたことはないが、その可能性が一番高いだろう。

違う意味でも頭が痛くなつてきた。このままベッドに倒れ込みたくなる体に活を入れ、涼子は眉（み）間（ま）を押さえて現状把握に努める。

昨日のパーティーで着ていたドレスは、腰の辺りでクシャクシャに丸まっている。ストッキングは脱いだようだが、ショーツは穿いているので最後まではしてないのかもしれない。

——それとも、した後で穿いた？

二日酔いで鈍る頭で思考を巡らせるが、まったく記憶がないので判断がつかない。

そこでふと、涼子は少し離れた場所から水音がすることに気付いた。

どうやら嫌な予感の中らしい。

相手の男性がいるのなら、このヨレヨレになつたドレスを脱いで、なにか着なくては……と、慌てふためいている間に水音が止まり、人の気配がこちらへと近付いてくる。

身なりを整えるのを諦めた涼子は、さつきまで包まっていた羽毛布団を引き寄せ、首より下をすっぽりと隠した。

「ああ、起きたか」

そう言つて、開け放した部屋の戸口に現れた人物の姿を見た瞬間、涼子は目を剥き唇をわなわなと震わせた。

それは、髪から水滴（したた）を滴らせた男性が、バスタオルを腰に巻いただけの格好で引き締まつた上半身を晒していたからではない。

その男性が、涼子が苦手としている芦田谷剛志だったからだ。

「あ……芦田……」

口をパクパクさせるけれど、言葉が上手く出てこない。

そんな涼子を見た剛志は、口の端で微かに笑う。

顔立ち自体は上品で美しいのだが、不遜な表情や惜しげもなく晒された筋肉質な肉体から、荒々しい野性味を感じる。

「おはよう。昨日のドレスでは帰れないだろうから、懇意（こんい）にしている外商に手頃な着替えを用意させた。サイズは、妹と同じくらいでよかつたよな？」

髪を拭く剛志は、視線をテーブルへと向ける。

さつき視界に入ったカジュアルブランドの紙袋がそれなのだろう。

「あの……えつと……ここは……」

お酒の余韻も二日酔いも、全ての感覚が一気に遠のいていく。

動揺する涼子を見て、剛志が妖艶な笑みを浮かべて問いかけてくる。

「なんだ、昨夜のことを覚えていないのか？ 自分からあんなに激しく求めてきたくせに」

「——っ！」

死刑宣告を受けた気分だ。

「シャワーを浴びて、着替えるといい。昨夜のことは、朝食を取りながらゆっくり聞かせてやるよ」

蒼白になってベッドに倒れ込む涼子にクスリと笑い、剛志は他の部屋へと移動していった。



濡れた髪のままバスローブを羽織り、リビングで経済新聞に目を通していた剛志は、慌ただしく寝室を飛び出していく人の気配に顔を上げた。

途中で躓いたのか、パタパタと離れていく足音が一瞬止まり「痛っ」という声が聞こえる。

「逃げたか？」

それを裏付けるように、すぐに部屋の扉の開閉音が聞こえてきた。

それを聞き、新聞に視線を戻した剛志は、悪戯な笑みを浮かべる。

慌てふためいて逃げ去ったことを考えれば、彼女がどんな誤解をしているか確認するまでもない。

剛志としては、さっきの台詞は挨拶代わりのジョークのつもりだった。

——まあ、多少の悪意が含まれていたことは否定しないが。

狼狽える涼子の顔を思い出し、ザマアミロと舌を出す。

昨夜のパーティーで自分にあつかんべーをし、グラスの酒を勢いよく飲み干した涼子は、その後もご機嫌な様子で酒を飲んでいった。

妹の友人である柳原涼子は、今時珍しくカラーリングもパーマもしていない艶やかな長い黒髪が特徴的な女性だ。細身で背が高く凛とした美しさがあり、華美な化粧をせずとも人目を引く。

その性格は実にシンプルで、良く言えば肩書きで人を判断しない。悪く言えば年上で社会的地位のある剛志にも遠慮がない。

以前、妹が無断外泊した際、大騒ぎする父を落ち着かせるため「友人と飲んでいるのだから」と意見した。すると父は、妹の友人たちに電話して確かめると言う。

虫の居所の悪い時の芦田谷廣茂の物言いの酷さを承知している剛志は、真夜中に突然電話をかけられたうえ、横柄な物言いであれこれ聞かれては相手が気の毒と思いい、電話をかける役を買って出た。ところが、電話に出た涼子に「ストーカー気質」と言われ、そのまま冷やかに説教を食らう羽目になったのだ。

確かに芦田谷家のネットワークを使って連絡先を調べ、面識がある程度の女性にいきなり電話をしたのは失礼だったかもしれない。

だがエネルギー業界の重責を担う芦田谷家に生まれ、人に傅かれることが当たり前として育った

剛志にとつて、それは衝撃的な出来事だった。正直プライドも傷付けられた。

それでも昨夜、酔い潰れた彼女がたちの悪いお坊ちゃまに連れ帰られそうになっていたのを助けてやったのは、紳士的対応と言えよう。

酔い潰れた彼女を自宅まで送ろうと思えば送れたが、それでまたストーカー呼ばわりされるのも面白くない。それで、自分のために事前に予約していたホテルに連れてきたのだ。

何故、家に帰らずホテルの部屋を取っていたかと言えば、パーティー後に妹が外泊すると知り、自分とは桁違いの熱量で妹を溺愛する父や兄に八つ当たりされるのを避けるためである。

妹に連絡を取ることも考えたが、恋人同士の邪魔をしても悪いと思い、控えておいた。

結果、彼女の着替えを用意したうえで、ホテルのスイートルームの主寝室を譲ってやったのだから、是非とも以前のストーカー発言を撤回していただきたいものだ。

「いい奴じゃないか俺……」

さつきの悪意あるジョークを忘れ、剛志はしれっと自画自賛する。

シャワーを浴びた自分を見て、目を白黒させる涼子の表情はなかなか面白かった。

細身で整った顔立ちの彼女は、男性に媚びた話し方をしないこともあり、落ち着いた美人という雰囲気だ。そんな彼女のあんな表情は、もう二度と見られないだろう。

それを思うと、彼女が悪夢として想像したのであろう一夜の過ちあやまちなどなかったと教えてやるのは、なんだか少し惜しい気もする。

だからといって、このまま誤解を放置しておいてよいものかと思案しつつ、剛志は涼子を追いか

けるでもなく新聞を読み進めた。

## 1 後悔と交渉

酒は飲んでも飲まれるな。

休み明け、品質保証部のデスクでパソコン画面をスクロールさせる涼子は、夏期休暇中の悪夢以来、幾度となく心に刻んだ言葉を反芻する。

あの日、逃げるようにして帰って以降、一度も剛志と顔を合わせていなかった。

休暇中、寿々花の家に行く機会はなかったし、彼からもなんの音沙汰もない。もちろん、涼子から連絡を取ることもなかった。

ちやっかり彼が用意してくれた服に着替えて帰ったので、さすがに一言お礼を言うべきだったのかもしれないが、あの状況で彼と話したら愧死きせつしていただろう。

揃えてくれた品にはトワレや下着も含まれていた。それらの品を用意してくれた外商が、どんな勘違いをしていたか考えるだけで恐ろしい。

——たぶん、なにもなかった……

なんであそこにしたかとは思いつけないままだが、自分の体にはなんの余韻もなかったのだから、それは間違いないはずだ。というか、そう願いたい。

あれは、美酒を目の前になると自制心を失い飲み過ぎる自分への天罰だ。きつと、そうに違いない。

——かの李白先生は、酔った勢いで月を取ろうとして溺れ死んだんだっけ……

伝説によれば、中国の唐の時代、酒の詩を多く残した詩人の李白は、酒に酔って船の上から水面に映る月を捉えようとして、船から落ちて溺死したという。

二度と飲まない……とは約束できないけど、これからは節度をもって飲むことにする。だから、あれはなかったことにして欲しい。

そう心で祈りつつ、自戒の意味も込めて仕事にいそしんでいた涼子は、「ん？」と、目を細めて画面を凝視した。

ひよいと顔を上げて、斜め後ろのデスクに声をかける。

「佐倉さん、休暇に入る前に入力しておくように頼んでおいた名簿のファイル、どこに入ってる？」

涼子の言葉に、緩くウエーブのかかったロングヘアの女性がこちらを見た。

甘いメープルシロップを連想させる艶やかな明るい栗色に髪を染め、メイクも服装もその雰囲気によく似合うパステルカラーで統一されている。

彼女は涼子と目が合うと、可愛く目を見開きパチンと手を合わせた。

その芝居がかった動きに、涼子はまたかと微かに肩を落とす。

「柳原先輩、休暇中に私がどこに行ったか知っています？」

甘ったるい声で、彼女——佐倉ティアラが言う。

自分に都合の悪い質問を受けると、脈絡のない質問で返してくるのは彼女の悪い癖だ。

涼子は、目を細め興味がないと表情で返す。

その反応が不満だと言いたげに、佐倉は右手の人差し指を頬に添えて頬を膨らます。

男性が見れば可愛いと思う仕事なのだろうけど、業務確認をしたかっただけの涼子としてはただただウザい。

「ファイルどこ？ 夏期休暇の間に、同車種の純正バックモニターの不具合が九件続いているの。たぶん猛暑のため回路に負荷がかかったせいだと思うけど、念のため下請けの在庫管理をしておきたいんだけど？」

涼子が籍を置く品質保証部は、製品の在庫状況を把握し、部品製造を依頼している下請け企業との連携を取り、滞りなく製品を供給させるための部署だ。

普段はそれほど忙しくない部署だが、万が一リコールとなれば、代替部品の確保と販売店への供給などで慌ただしくなる。

そうでなくても、夏期休暇の後例年、上半期の決算に向けて忙しくなる時期だから、不測の事態が起きる前に備えただけはおきたい。

頭の中で段取りを考える涼子は、佐倉の言葉を無視して「ファイルどこ？」と、催促する。

「今年、新しい水着を買ったんですけど、私、皮膚が敏感じゃないですか。だから日焼けしないように、ナイトプールしか行けないんですよ。それでも、なんか焼けちゃった気がするんです」

自分の問いかけを無視された佐倉は、一瞬、ムッと眉を寄せた。でもすぐに表情を切り替え、ブ

ラウスの袖を捲つて腕を見せながら、自分の話を続ける。

「……」

——知らん。知らん。だったら無理して泳がなきゃいいでしょ。大体、日焼けを気にするならば、普段からキャミソールなんて着なきゃいいのよ。

声を発することなく、心の中で佐倉の発言一つ一つに返しておく。

「なんだかヒリヒリしてるし、集中力落ちちゃいますよね」

「……」

——貴女に集中力がないのはいつもです。それに仕事を頼んだのは休暇前なんだから、休暇をどう過ごしたかは関係ないでしょ。

冷めた表情で相槌一つ返さない涼子に、佐倉は不満げに再度頬を膨らます。

ふてくされた様子でだんまりを決め込む佐倉に、彼女が求めている言葉がなんなのか察しがつく。

可愛くて可哀想な自分を助けてくれる誰かを、彼女はいつも求めている。でも涼子が、彼女の必要にお応えする義理はない。

「入力、今からしときますね」

無言で向き合うこと数秒。佐倉は涼子をしばし睨んだ後で、唇を尖らせ渋々言う。

「急ぎでお願いね」

同性相手にも自分を可愛く見せる所作を忘れないところは感心するが、自分が悪い時には一言謝る良識を持つて欲しい。

注意したところで、いつも会話が噛み合わない佐倉の心に響くとは思えないので口にはしないが。そのままパソコンに向き直ろうとする涼子に、佐倉が「あ、それと先輩」と、声をかけてくる。

「……？」

珍しく謝ってくるのかと視線を戻すと、佐倉はウフツと、可愛く首をかしげて言った。

「柳原先輩も少しくらい遊んでおかないと、あつという間にオバサンになっちゃいますよ。もう半分、オバサンなんだから」

「……」

「うちのママは、先輩の年にはもう結婚してましたよ？」

はあっ？ と、眉を寄せる。そんな涼子の顔を見て、佐倉は嬉しそうに肩をすくめ、椅子をくくりと回して自分のデスクへと向き直った。

「急いでるなら、自分でやった方が早いのに」

聞こえよがしなその呟きで、彼女の意図することは理解できる。

入力を代わると言ってくれなかった涼子に対する抗議として、嫌味の一つでも言いたかったのだろう。

確かに二十三歳の佐倉に比べれば、今年二十八歳の自分は若くない。だけどおばさん呼ばわりされる年齢ではないはずだし、結婚も年齢に追い立てられるようにしてするものではないはずだ。

第一、佐倉に哀れまれるほど、寂しい休日を通り越してはいない。

特にこの夏は、いろいろと衝撃的な休暇を過ごさせていただいた。

「……」

苛立ちと共に、忘れることにしたはずの悪夢が蘇<sup>よみがえ</sup>ってきてしまう。神様に鬮<sup>ひいき</sup>足されているとしか思えないハイスペックな男は、その体軀もまた神様に鬮<sup>ひいき</sup>されたものだった。年齢は三十代後半と寿々花から聞いた気がするが、背が高く引き締まった体は若々しく、少しも年齢を感じさせなかった。

そこまで考えて、涼子は、自分がえらくしつかり剛志の体を観察していたことに気付く。

「……仕事しよ」

疲れたように呟くと、涼子はデスクに向き直るのだった。

剛志との記憶や佐倉の発言にイラつきながらも、その日の業務を終えて帰ろうとした涼子は、エレベーターを待つ人の中に佐倉の姿を見つけた。

挨拶<sup>あいさつ</sup>しようと近付くと、佐倉がスマホを頬に添えて電話している。

「初日から先輩に仕事の無茶ぶりされて、遅くなっちゃった。最悪っ」

佐倉の言う先輩とは、涼子のことだろう。あれは無茶ぶりではなく、休み前に済ませておくよう頼んでおいた仕事を、彼女が放置していた結果にすぎない。

一瞬、次のエレベーターを待とうかと思つたが、こちらが気を遣うことでもないのでそのまま並ぶことにした。

ただ、これ以上不愉快な会話を聞かされたくはないので、素知らぬ顔で声をかける。

「お疲れさま」

ビクツと肩を跳ねさせた佐倉が、気まずい表情で振り返つた。

「ああ、柳原先輩……お疲れさまです」

慌てて通話を切りぎこちなく笑みを向けてくる佐倉は、自分の話を聞かれていたかどうか視線で窺<sup>うかが</sup>つてくる。涼子はそれを無視して、ちょうど到着したエレベーターに乗り込んだ。

すると佐倉も、なにもなかったような表情で乗り込んで来た。

通話は切つたようだが、今度はメールでもしているのか佐倉はスマホを操作し続けている。

——その勢いで仕事も片付けてくれればいいのに。

内心で独りごちる涼子は、見るとはなしに佐倉に目をやる。

佐倉ティアラ。その名前は、メルヘンが大好きな彼女の母親が付けたものだと、聞いてもいないのに本人から何度も聞かされている。

ティアラのように光り輝くお姫様に育つようにと名付けられたそうだ。そして彼女は、母の期待に応<sup>こた</sup>えるべく、王子様みたいな素敵な男性と物語のような恋をして、幸せな結婚生活を送るのが夢なのだから……

これまた一方的に語られる彼女のライフプランに、「ティアラはお姫様を引き立てる装飾品に過ぎないぞ」と、ツッコむのはさすがに大人げないのでやめておいた。

夢を見るのはいいけど、人の話を聞いてくれないのはなんとかしていただきたい。

困つたものだと軽く首を回した涼子は、エレベーターを降りてオフィスのビルを出る。

「……？」

そのまま駅へ向かおうとしたが、何故か会社の前に人だかりができていて気になった。比率としては、女性の方が多いだろう。多くの社員が集まり、遠巻きになにかを見ている。好き好きに言葉を交わす社員たちの明るい表情から、重大な事故や喧嘩ではないようだ。そうすると、涼子の野次馬根性も働いてしまう。

ヒョイツと首を傾げ人垣の隙間から様子を窺った涼子は、次の瞬間、眉根を寄せて頬を引き寄せた。

すぐ側で誰かが「カッコイイ」と、夢見心地な声を漏らしている。

その声に視線を向ければ、所属部署は違うがなんとなく見覚えがある女性社員が、手を組み合わせてうっとりとした顔をしていた。

「……っ！」

女性社員の言葉に驚きつつ、涼子はもう一度、周囲の人々の視線が集まる先を確認する。

会社の正面玄関前に止められた一台の高級外車。その車に背の高い男性がもたれかかっているのが見えた。

遠目にも粋なデザインのスーツを着ているのがわかり、それが彼のモデルばりのスタイルの良さを際立たせている。

——芦田谷剛志……何故アイツがここに!?

人に見られることに慣れているのか、無駄に心臓が頑丈なのか。剛志は周囲の視線を一身に受け

ながらも、涼しい顔で髪を掻き上げる。

その何気ない仕草だけで、周囲が色めきたつのだから腹立たしい。

あけぼのエネルギーの重役様が、こんなところでポーズを決めている理由はわからないが、彼が偶然ここにいるということはないだろう。

だとすれば、先日のことでもなにか話があるのかもしれないが、関わらないのが得策だと本能が警告している。

涼子は腰を屈めると、人混みに紛れてここから立ち去ることに決めた。

しかし、そんな涼子の思いに気付くことなく、佐倉が隣ではしゃいだ声を上げる。

「柳原先輩、あの人、すごく格好良くないですか？ 格好いい彼氏のお迎えとかって、憧れますよね。……柳原先輩、聞いてます？」

——ちよっ、バカッ！

涼子は腰を屈めたまま、人差し指を唇に添えて静かにするよう合図する。普通ならそれで黙ってくれそうなものなのだけど、ここで察してくれないのが佐倉ティアラだ。

「柳原先輩、なんで腰を屈めているんですか？ お腹痛いんですか？」

きやびきやびした声がうるさい。こんなに苗字を連呼されて、アイツに気付かれたらどうしてくれる。

必死に唇に人差し指を添えて「黙って」と合図するのだけど、それを見た佐倉は、涼子を真似て人差し指を唇に添える。そしてその指を、ゆっくり頬に移動させて軽く首をかしげた。

甘い色のネイルに彩られた指が、柔らかな頬に沈む。

「……」

異性受けはいいだろうけど、この状況でされてもただイラつくだけだ。

もう無視して帰った方が早いかも……そう思った次の瞬間、佐倉が大袈裟に目を見開いた。それと同時に、中腰になっていた涼子の腰に手が回され、体がふわりと浮かんだ。

「キヤアッ」

不意の浮遊感に驚く涼子が小さく悲鳴を上げる。その背中中は、すぐに誰かの体に受け止められた。こちらを見つめる佐倉は、口をあぐりと開けポカンとした表情をしている。

背中に感じる逞しい胸板や上品なトワレの香りに、嫌な予感しかしない。そしてそれを証明するように、耳元で低く艶のある男性の声があった。

「俺をここまで待たせる女は、滅多にいないぞ」

「……ま……待ち合わせた覚えはないです」

声を絞り出した涼子に、剛志は彼女の腰に手を回したまま言い返す。

「電話をすると、君は怒るじゃないか」

目を細め甘い声で告げた剛志が、ニヤリと微笑む。

その表情を見れば、彼が周囲の反応を楽しんでいるのだとわかる。

頬をヒクヒクと痙攣させる涼子に、剛志が悪戯を楽しむ少年のような表情で言った。

「話の続きは、場所を変えてしようじゃないか」

「なんでっ！」

語気を強めて腕を払うと、剛志と向き合う姿勢になった。

するとどうしても、彼の特徴的な鳶色の瞳を見つめる形となってしまう。

その瞳に気を取られているうちに、剛志が涼子の耳元に顔を寄せて囁く。

「この間のこと、ここで話してもいいのか？」

「……ッ」

その言葉に涼子が頬を引き攣らせると、弱みを見つけたと言わんばかりに嬉しそうに口角を上げた。意地悪さを含んだ艶やかな笑みを浮かべた剛志が、顔を寄せたまま低い声で囁く。

「俺の誘いに乗った方が、メリットは多いぞ」

悪魔のような囁きに、肌がぞわりと粟立つ。

感情に任せて爪先を踏み付けてやりたい衝動に駆られるけれど、チラリと視線を向けると佐倉が蕩けるような表情で剛志を見ているのに気付く。

下手に抵抗して、彼女の前で不用意な発言をされたらことだ。

「……わかりました」

がつくりと項垂れた涼子は、剛志に誘導されるまま見るからに高そうな彼の車に乗り込む結果となった。

「恥ずかしくて、明日から会社に行けない」

さつきは呆氣に取られ、ポカンとした表情で自分たちを見送った佐倉も、明日には正氣を取り戻し、涼子を質問攻めにしてくることだろう。

「それは悪かった。よければ、別の職場を紹介するが？」

助手席に座り両手で顔を覆っていた涼子は、運転席の男を睨んだ。

ハンドルを握る剛志は、こちらを見ることなく軽い口調で問いかけてくる。

「どの企業がいい？」

この男の場合、その台詞を冗談で終わらせない力があるだけにたちが悪い。

もし涼子がどこかの企業の名前を出せば、本当に転職の段取りを付けてくるのだろう。

「……用があるのなら、まず電話をしてください」

「前に電話をしたら、ストーカー呼ばわりしてきたじゃないか。幸い勤務先は承知していたから、ああして会社の前で待たせてもらうことにしたんだ。これで自宅の前で待てば、またストーカーなんだと騒いだらう？」

確かに彼の妹の寿々花と自分は、同じクニハラの社員だ。

ただし都内だけでもクニハラの関連施設は複数あり、寿々花は郊外にある技術開発室に勤務していて、本社の品質保証部に勤務する涼子とは別だが。それを知っていて本社の前で待っていたのなら、ストーカー気質は健在らしい。

——大体今の言い方だと、私の家の場所も知っているということでは……

「会社や家の前で待ち伏せするくらいなら、今度から用がある時は電話にしてください。それと、

あの日のことは、絶対に秘密にしてください」

その約束だけは取り付けておきたい。

「それが、人にものを頼む時の態度か？　まずは、俺の話に耳を傾けるべきでは？」

怖い顔をして睨む涼子に、剛志が挑発的な発言をする。

その表情を見る限り、涼子の反応を楽しんでいるようだ。

苛立ちで唇が波打つように震えてしまう。

この男のことはもとより苦手だし、寿々花の兄でなければ、言葉を交わすこともないような相手だ。

大企業の重役様と、言葉遊びのようなやり取りをしてもらちが明かない。それなら、さつきと話を済ませた方がいい。

「では、ご用件は？」

涼子が仏頂面で促すと、剛志が涼しい顔で返してくる。

「せっかくだ。ゆっくり食事を取りながら話そう」

「なんで？」

「君とゆっくり話したいから」

「胡散臭いです」

剛志と二人で食事をするなんて冗談じゃない。その不満を露骨に顔に出す涼子に、剛志が愉快そうに喉を鳴らす。

そして意地悪な笑みを浮かべて確認してくる。

「今日のお迎えがご不満とあれば、明日、改めて最初からやり直してやるが？」

「最初……」

「今日のあれで物足りないのなら、明日は花束でもつけようか」

それは、また会社の前で待ち伏せされるという意味だろうか。

「どうする？」

剛志は、涼子を横目で窺<sub>うかが</sub>ってくる。その口元は、どこかニヤついている。

——これはもう脅<sub>おそ</sub>しだ。

もしかしたら、剛志が会社の前で涼子を待ち伏せしていたのは、涼子に心理的プレッシャーをかけて、自分の望むとおりの返答を引き出すためだったのかもしれない。

相手の手のひらの上で転がされるまま、剛志と食事をするなんて冗談じゃない。そうは思うのだけれど、それを覆<sub>くつが</sub>す方法が見つからなかった。

「ご馳走になります」

苦々しい顔で涼子が返すと、剛志がそれでいいと言いたげに頷いた。

顔の構造としては友人の寿々花とよく似て美しいけれど、傲慢さを隠さない強気な表情のせいで、寿々花とは似て非なる印象を醸<sub>か</sub>し出している。

——傲慢でオレ様気質の王子様。

涼子は、心の中でそう相手を断じて、運転席の剛志から視線を逸らした。

しかし、徐々に暗くなっていく助手席の窓に剛志の顔が映っているので、あまり意味はない。

そのことにため息を漏らし、涼子は彼と電話で言葉を交わした日のことを思い出す。

あけぼのエネルギーの令嬢である友人の寿々花に、過保護で面倒くさい父親と二人の兄がいることは、本人から聞かされていた。

寿々花のおまけで参加するパーティーなどで、それなりに面識はあったが、これといった会話を交わした記憶はない。

そんな相手から突然電話がかかってきたのは、今年の夏の初め頃。

見知らぬ番号からの深夜の電話を不審に思いつつ出ると、それが剛志だった。

最初、寿々花の行方<sub>ゆくえ</sub>を心配する剛志の口調や芦田谷という家柄から、誘拐の心配をした。ただ話を聞くうちにわかったのは、人と会うから夕食はいらなと言って出かけた寿々花が門限を過ぎても戻らない、ということだった。

しかも最近、しばしばその友人と食事を取ることが続いていたという。

カレンダーを見れば、その日は金曜日。

寿々花は涼子より年上だし、聞けば門限は二十三時だという……

あほか——それが、状況を理解した涼子の感想だった。

最初は本気で心配していただけに、いい年をした娘が門限を一時程度過ぎただけで大騒ぎしている芦田谷家の面々に心底呆れてしまった。

誰かに会うことをほめかしていた年頃の娘が、門限を破る。それが意味することなど、少し考

えればわかるはず。

デートでもしていて、相手と別れがたくて帰るのが遅くなっているだけだ。それを涼子がやんわり伝えると、剛志から「君の価値観で語られては困る」と、不機嫌に返された。夜中に突然電話してきたその言い様。よく考えたら、教えてもない自分の番号を知っていることにも納得がいかない。

以前寿々花が、面倒くさい家族が迷惑をかけそうだからと、恋愛を諦めるようなことを言っていたのを思い出した。それでつい、勢いで「そうやってストーカー気質に捜し回る家族が嫌で、家出したんじゃないですか？」という嫌味から始まり、いろいろ説教してしまったのだ。

それから一ヶ月ほど経った先日のパーティーで、顔を合わせた剛志に「私の言ったことが正しかった」という意味を込めて、あつかんべーをしたのは気分がよかった。

よかったのだけど、ご機嫌な気分が美味いお酒を飲んだ後の記憶が曖昧で、気が付けばあの状況に陥っていたのだ。

そんな剛志と、何故か食事をする羽目になっている。

——酒は飲んでも飲まれるな。

あの日以来、何度も繰り返している言葉を胸に、涼子はついでに「芦田谷剛志のペースに吞まれるな」と心に刻んでおいた。

仲居の案内を受け、剛志は堂々とした態度で檜の廊下を歩いていく。

その後が続く涼子は、足下を照らす間接照明の柔らかな明かりに視線を落とした。廊下全体の照明は控え目で、視線は自然と仄かに明るい足下へと向く。そうやって足元へ視線を誘導されることにより、他の客とすれ違った際に互いの顔を認識しづらくしているのだろう。

だが、そうした視覚効果はあくまでも保険であり、座敷に案内する時にも細心の注意が払われているに違いない。なにしろ剛志が、客のプライバシーを極度に重んじている店と言うくらいなのだから、人とすれ違うこと自体がまずなさそうだ。

「こちらです」

そっと床に膝をついた仲居が襖を開けた。

そこで一度動きを止めた剛志が、涼子を振り返り挑発的に口の端で笑う。

「取って喰われるとも思っているのか？ 美味しいものを食わせてやるから、そんな難しい顔をするな」

剛志の台詞に、仲居が控え目に微笑む。気まずさに眉間に寄っていた皺を撫でると、剛志から「そもそも俺はグルメだ」と付け足され、さらに深い皺が寄った。

そんな涼子の表情を見て、剛志が楽しげに目を細めて部屋へと入っていく。

ムスツとしつつそれに続くと、剛志は下座に腰を下ろし涼子に上座を譲ってきた。

いろいろムカつく相手なので、遠慮なく上座に腰を下ろす。

フンツと鼻息荒く居住まいを正す涼子に、くつろいだ様子の子の剛志がお品書きへと視線を向けて言った。

「料理はお任せで頼んであるが、他に気になる品があったら好きに注文してくれ。酒も好みのものを選んでいい」

腹いせに高いものを頼んだところで、この男の財布にはまったく響かないのは承知している。この前、涼子のために用意してくれた着替えの品々でさえ、彼にとつてはたいしたことではなかったのだから。

それでも好奇心からお品書きに視線を向けた涼子は、次の瞬間、パッと顔を上げた。

「ホントに、好きに選んでいいんですか？」

突然キラキラと目を輝かせる涼子に、剛志が僅かに背中を反らす。それに構わず、涼子は重ねて確認した。

「お酒、好きに頼んでいいんですか？」

それを聞き、納得した様子で剛志は頷く。

「希望があれば、そこに載っていない秘蔵の品も用意させるが？」

その言葉に、涼子の目がさらに輝き、普段なら彼に向けることのない笑顔まで添えてしまう。だが次の瞬間ハタと表情を改め、口元を手で覆って唸る。

「誓ったばかりなのに」

独り言のつもりが、剛志の顔に皮肉な笑みが浮かんだ。

「学習能力は高いようだ」

思わずなにか言い返そうとするが、剛志が「よかったよ」と呟き、仲居にある酒の銘柄を告げた。

それは年間生産量が恐ろしく少ない、酒好きの間で幻の一品と囁かれていた品だった。

そんな簡単にお目にかかれる品ではないと思いつつ、剛志が口にするのだからと期待を抱いてしまう。無意識に手を組み合わせる涼子の前で、仲居が頷いた。その姿に、涼子の中から不満の言葉が吹き飛んでいく。

そんな涼子の表情を見ていた剛志が、したり顔で窘めてきた。

「酒好きは構わんが、量より質を楽しむべきだ」

仲居の目もあるので、さすがに「質と量、両方楽しみたいんです」とは口にしないでおく。

「お気に召す品があつてなにより」

仲居が襖を閉めると、剛志がそつと笑う。

その笑い方に、よからぬ企みが見え隠れして得体の知れない不安を感じた。

「あの……お話というのは？」

背筋を伸ばし確認する涼子に、剛志が笑みを深める。

「まあ急ぐな。話は酒を楽しんでからでいいだろ。あれこれ考えながら飲んだら、幻の酒の味が落ちるだけだぞ」

「話が気になって、お酒の味を楽しめません」

「話の内容によつては、目の前の酒を諦めて帰るのか？ どのみち飲むなら、話は後にしてもいいんじゃないか？」

——悪魔の囁きだ。

そしてこの美酒は、値段以上に高くつきそうな気がする。

そうは思うのだが、幻の酒を目の前にちらつかされた状態で、それでは……と席を立つ気にはなれなかった。黙り込む涼子に、剛志が駄目押しのように付け足してくる。

「焼酎もいけるクチなら、薩摩焼酎のレアものをキープしているから、それも試すといい」  
銘柄を告げられた涼子の喉が、無意識にゴクリと鳴る。

それを見逃さず、剛志は「ゆっくり楽しむといい」と、勝者の笑みを浮かべるのだった。

——さすが天下のあけぼのエネルギー。

最初に運ばれてきたお通しと、一杯目の酒を味わった涼子はしみじみとそれを感じた。

以前の持論として、酒は生き物なので最適な状態のものを最高の環境でいただくことで、味わいはさらに良くなると考えていた。

この料理と酒を味わえば、その持論が正しかったのだと実感できる。

「ご満足いただけただけ様子で」

日本酒から剛志がボトルごと下ろしてくれた焼酎のロックに切り替え、それを堪能していた涼子に剛志が言う。

酒と料理の醸し出す調和にすっかり心奪われていた涼子は、そこで剛志と食事をしていたことを思い出した。

「で、ご用件は？」

涼子は表情を改めて、再び剛志へ話の内容を問う。

「そんな怖い顔をするな。せっかくい表情をしていたんだから、そのまま酒を味わっていただろう」

今日は車だからとお茶を飲んでいる剛志は、胡坐をかき頬杖をついている。ベストは着ているが、ジャケットを脱いでネクタイを緩めた彼からは、随分とくつろいだ雰囲気が漂う。

——なんか、無駄に色気が溢れている。

もしここに佐倉がいれば、王子様の艶っぽい姿に興奮してテンションを上げまくり、卒倒したかもしれない。でも自分はこの男の色気に惑わされたりしないと、半眼になった涼子は、さつきと同じ台詞を繰り返す。

「それで、ご用件は？」

冷めた表情で問いかける涼子に、剛志はつもらないと言いたげな表情を浮かべた。

だがすぐに、なにか企んでいそうな悪い笑みを浮かべると、軽く腰を浮かせて腕を伸ばす。そして、空になついていた涼子のグラスに惜しみなく焼酎を注いだ。

グラスから溢れそうな酒を見て、ついそれを口へと運んでしまう。

「美味しい酒と料理は好きだろうか？」

「まあ……」

さすがに否定しようがない。渋々といった顔で頷く涼子に、剛志がしたり顔で頷く。そんな彼の口の端に、悪巧みの匂いが漂っているのを涼子は見逃さない。

「では、それを堪能しながら、俺に口説かれてみないか？」

「はいっ？」

あまりに突拍子もない発言に、手にしていたグラスを落としそうになってしまふ。

それを慌てて持ち直した涼子は、勢いそのまま焼酎を啣る。

氷がグラスの中で揺れて、カランと涼やかな音を鳴らした。

「冗談はやめてください」

「本気だ」

白々しいと、涼子は目を細めて彼を睨んだ。男性的な長い指で自分の顎のラインを撫でる剛志の表情は、とても真面目に話しているとは思えない。

「貴方と付き合うなんて、あり得ないです」

「それは、俺としてもあり得ない話だ」

涼子の言葉に、剛志が楽しげに笑う。

——飲んでもいないのに、酔っているのだろうか。

意味がわからないと涼子が眉根を寄せる。でも顎に指を添えたままの剛志の表情を見れば、わざと戸惑わせるような言い回しをしているのだと気付く。

「からかうのはやめてください」

涼子が冷めた声で言うと、剛志はつまらなそうに肩をすくめて居住まいを正す。

「この前のパーティーで、妹が婚約発表をしたのは見ていたな？」

「ええ、まあ……」

あの日、寿々花の恋人として尚樹が紹介された。

堂々とした振る舞いで周囲からの祝福を受ける尚樹の姿に、いつしか彼こそが芦田谷廣茂が娘の婿にと選んだ男に間違いない、という話になっていた。

もちろん、芦田谷家の男性陣の表情を見れば、それが大いなる勘違いであることがわかる。

「鷹尾さんに、してやられましたね」

あの日の剛志の顔を思い出し、つい笑ってしまう。

そんな涼子の顔を見て、剛志はため息を漏らした。

「当然のごとく、親父殿は彼を快く思っていないが、喜ぶ妹の手前、正面切つて反対もできずにいる」

「はあ」

あの芦田谷会長にも力業で解決できない問題があるのかと、変に感心してしまう。

寿々花の婚約者である鷹尾尚樹は、わかりやすいイケメンであると同時に、一代で財を成したIT系企業の社長でもある。やんちゃで人好きのする性格をしていると思うのだが、どうも芦田谷家の面々とはそりが合わないらしい。

ただ涼子としては、彼のような気骨ある男性でないと、この一族とは渡り合えないと考えている。「だからといって、諸手を挙げて二人の関係を認める気も、進んで奴を娘の婿と認める気も毛頭な」

あれこれ思考を巡らす涼子に構うことなく話を続ける剛志は、不満げな顔をしている。その表情からして、彼も二人の結婚に反対しているのかもしれない。

「まさか私に、二人の関係を邪魔しろとでも言う気ですか？」

この話が自分にどう関係してくるのか推理した涼子は、露骨に警戒心を向ける。

「寿々花さんが、生涯独身でいれば満足なんですか？」

もしそうなら、妹の人生をなんだと思っているんだ。

今度はどんな説教をしてやるうかと口を開こうとしたが、それより先に剛志が首を横に振る。

「結婚しても独身のままでも、俺としては、寿々花が幸せならどちらでも構わん」

面倒くさそうに息を吐いた剛志は、涼子に視線を向けてくる。

「……なんですか」

頬杖をつき半眼で見つめられると、涼子という存在を値踏みされているようで落ち着かない。

居心地が悪そうに身じろぎする涼子に、剛志が言った。

「大体そんなこと頼んだところで、君は引き受けたりしないだろう？」

大きく頷くと、剛志は肩をすくめて話を続ける。

「そんな無駄な交渉はしない。それに親父殿がどんな横槍を入れようと、あの男なら障害を障害とも思わず、易々と結婚までこぎ着けるだろう」

「じゃあ……？」

自分になにをして欲しいというのだろう。

ちっとも話が見えてこなくて、眉間に皺を寄せる。そんな涼子に、剛志がことさら大きなため息を吐いた。

「二人が上手くいったせいで、少々面倒事に巻き込まれて迷惑している」

「……？」

首をかしげる涼子に、剛志は物憂げに語る。

「パーティーの翌日から、気の早い取り巻きどもがいそいそと婚約祝いを持ってきた。あちらとしては、いち早く祝辞を届けることで、父のご機嫌を取るつもりだったのだから……」

その時のことを思い出しているらしく、剛志は斜め上を見上げ口角を下げる。

「そもそも、この婚約を認めていない父は『上の兄弟が結婚しないうちは、寿々花の結婚を認める気はない』と、祝いを持ってきた奴らに当たり散らした。……それをどう解釈したのかわからないが、取り巻きの間では、父が俺たち兄弟の見合い相手を探しているという話になり、我が家に見合い話が山のように届く事態となっている」

もとはただの思いつきだったはずが、持ち込まれる見合い話に芦田谷会長の気が変わったらしい。二人の息子に「ちようどいいから結婚したらどうだ？」と言い出したのだという。

過去に離婚経験のある兄の猛には、それを理由に持ち込まれる見合い全てを押し付けられ、妹には複雑な眼差しでことの成り行きを見守られているようだ。

「それは、お気の毒様で……」

剛志が心底嫌そうな顔をしているので、一応形だけは同情するフリをしておく。

そんな涼子を指さし、剛志は目を細めてニンマリと笑う。

「そこで、俺は恋をすることにした」

「はい？」

「好きな女性がいる。まだ付き合っていないが、今はその女性のことしか考えられない……と、家族に説明しておいた。幸い、外泊した直後だったから、それなりに信憑性があったようだ」

剛志が自分を指さす意味を理解して、涼子が悲鳴に近い声を上げた。

「冗談ッ！」

「自惚れるな。俺が、君に惚れるわけがないだろう。もちろん付き合いたとも思わない。さつきも言ったが、俺はグルメだ」

なにか苦いものでも呑まされたような顔をして、剛志が指をヒラヒラさせる。

つまり涼子など、恋愛対象にもならないということだ。

口説かれても迷惑だが、ここまで言われるのも、それはそれでムカつくものがある。

ムツと眉根を寄せる涼子に構うことなく、剛志は話を続けていく。

「言っておくが、これはただの時間稼ぎだ」

「時間稼ぎ？」

言葉をなぞる涼子に、剛志が軽く顎を動かす。

「妹の恋人はなかなかしたたかだ。妹が望むのであれば、父がどう難癖をつけようが、あの男はその希望を叶える。そうなれば、父も俺の結婚話なんて忘れるだろう。俺としては、それまで適当な

口実を作って見合い話をかわしたいだけだ」

涼子が嫌そうな顔をする。

「だからって、なんで私が……」

「手頃な存在だからだ」

「手頃？」

「そう。家族に嘘を信じ込ませるコツは、嘘にほどよく真実を交ぜ込むことだ。その点を踏まえ、このタイミングで一夜を共にした君はちょうどいい」

親指で中指を弾いて指を鳴らす剛志は、その指先を涼子に向けて言う。

「それに俺は、恋愛感情なんでもに人生を振り回されるのはごめんだ。恋人の演技を頼んだだけの相手に、下手に好意を持たれても迷惑だからな。その点でも、君は俺を好きになることはないだろうから、ちょうどいいんだ」

普通なら自惚れた発言に聞こえるかもしれない。だが、確かに剛志が恋人役を頼めば、喜んで引き受ける女性は山ほどいるだろう。そして演技とわかっていても、この男が相手では、あわよくばと女性が考えてしまう可能性は高い。

その点、涼子ならそういった心配は皆無だ。

己の身の丈に合った恋をしたいと願う涼子が、恋愛対象に求めるのは地位でも容姿でもない。話や価値観が合い、生活水準が近いこと。

後はできれば酒好きで、一日の終わりのご褒美として、一緒に晩酌を楽しめる人であればいい。

比奈のような覚悟があれば別だが、住む世界の違う人と恋をしても、苦勞するのは目に見えてい  
る。それがわかっていて、わざわざ目の前の規格外な御曹司に熱を上げたりはしない。

ついでに言えば、彼はストーカー気質の傲慢な王子様である。

そんな面倒くさそうな男、涼子の好みであるはずがない。

「確かに、私が芦田谷さんに好意を持つなんてあり得ないですね」

さつき散々ムカつく発言をされたお返しに、涼子が力強く同意する。

好きになるはずがないのはお互い様なのに、剛志の方も、そこまで断言されると面白くない感情  
が湧くらしい。どこか不満げな表情を見せた。

見目麗しく育ちのよい王子様は、ここまで明確に拒絶された経験がないのだろうか。

でもそんなのこちらの知ったことではない。

涼子はふてくされた剛志の表情を看に、焼酎に口を付ける。

グラスを手にしたまま剛志のくだらない話に付き合ったせいで、氷が溶けて焼酎が若干薄まって  
しまった。その味の変化もまた楽しみつ、涼子は剛志に確認する。

「芦田谷さん、今お幾つですか？」

「三十七だが？」

「恋人は、いないですよね？」

「いれば、こんなくだらん茶番を企てたりするわけないだろ」

その「くだらない茶番」に巻き込まれても迷惑なだけだ。

年齢と恋人の有無を確認した涼子は、焼酎をもう一口飲みアドバイスを口にする。

「じゃあ、これをいい機会と思って、素直に結婚したらいいんじゃないですか？ 芦田谷さんの立  
場なら、選びたい放題でしょ。容姿が好みの人を適当に見繕ってお見合いしていけば、そのうち  
性格的にも妥協できる相手に辿り着きますよ」

「冷めた結婚観だな……」

涼子だって同性の友だち相手になら、恋愛や結婚について夢を語ることはある。だけど剛志相手  
に、そういった話をするつもりはない。

「芦田谷さんと、関わりたくないだけです」

間髪を容れずに返した涼子に、剛志がニヤリと笑う。

「一夜を共にした仲なのに、冷たいな」

「あれは……」

もう、十分深く関わっているじゃないか。と、剛志がからかうような視線を向けてくる。

そんな剛志に、涼子は無表情を装って返す。

「あの夜、なにもなかったはずですよ」

「そうだったかな？」

はぐらかす剛志の口調はいつになく楽しそうだ。その話し方で、こちらを脅したり試したりして  
いるのではなく、ただからかっているだけだとわかる。

妹のいる彼としては、自然に出てくる悪戯心なかもしれないが、長女として育った涼子として

は反応しにくい。

それにもともと、剛志に見つめられると、何故か過剰に防衛本能が働いてしまう。だからつい、必要以上にキツく返してしまっていた。

「芦田谷さんのものが、恐ろしく粗末だというなら自信はないですけど」

涼しい顔で嫌味を言うと、一瞬、剛志が固まる。でもすぐに涼子の言わんとすることを察して、「なにもなかった。同じ部屋にも寝ていない」と認めた。

——御曹司、意外にピュアだな。

散々挑発するような態度を取っていた剛志が、気まずそうに視線を逸らす姿に、そんな感想を抱く。

学生時代は体育会系だったし、父子家庭のためバカでお調子者な弟の母親代わりをしていた涼子にとっては、軽い冗談のつもりだったのだが。

それなのに、そんな反応をされるとこちらまで恥ずかしくなり、思わず話題を戻した。

「でも本当に、結婚について考えるいい機会にしてみましたどうですか？」

芦田谷会長が乗り気なものも、そういったことを踏まえてのことなのではないか。

涼子の意見に、剛志が視線を逸らしたままお茶を飲む。その表情が物憂げで、なにか無神経な発言をしてしまったのだろうかと不安になる。

だが涼子へ視線を戻し、前髪を掻き上げる剛志の表情はさつきまでと変わらない強気なものに戻っていた。

「こちらにも、都合というものがある」

「そうですね……」

何気ない仕草でも様になる分、さつき一瞬見せた表情は、同情を引くための演技だったのではないかと思ってしまう。そのせいで、一瞬抱いた不安が消えていく。

心配して損したと、軽く唇を尖らせる涼子がグラスを傾けると、空になっっているグラスの中で氷が鳴る。

下ろしたてのボトルにはまだ十分焼酎が残っているが、話に気を取られグラスが空になっただけに気付かなかった。そんな涼子の仕草を、違う意味に捉えた剛志が言う。

「味に飽きたなら、他のものを頼むといい。だが外で飲む時はほどほどにしておかないと、そのうち本当にたちの悪い男に連れ去られるぞ」

何気なく付け足された言葉から、もしかしたらあの日、そうなりかけたところを助けてもらったのかもしれないと思った。

「……」

だとしたら、危ないところを救ってもらった自分は、剛志に借りがあることになる。

——あの部屋、スイートルームだね。

休みの間に、つい気になって自分がいたホテルの料金を確認した。そして、一泊に支払うには桁違いの額に一人悲鳴を上げたのだ。

しかも着替えまで用意してもらったのに、思えば自分は一言のお礼も言っていない。

「……」

「そこまで世話になったのだから、ちゃんとお礼を言うべきなのだろうか。お品書き越しにチラリと剛志の様子を窺えば、彼は頼杖をついたまま、やれやれと言いたげにため息を漏らしている。」

もし剛志が、この前の件のお礼として協力を要請してきたのであれば、涼子は断れなかっただろう。でも彼は、それを交渉の材料に使う気はないらしい。

つまり彼にとつて、この前のことは完全な善意による行為だったということだ。

「飲みたい酒は決まったか？」

涼子の視線に気付いて、剛志が問いかけてくる。

そう言っていただけなら、遠慮なく注文させていたどころ。

仲居を呼び新たな酒を注文した涼子は、襖が閉まるのを待つて剛志に視線を向けた。

「……さっきの話、引き受けてあげてもいいですよ」

「急にどうした？」

剛志が驚いた様子で目を瞬かせた。

そんな彼に涼子は視線を彷徨させた。自分が素直な性格をしていない自覚はある。

人に甘えるのは下手だし、ここまで散々言いたい放題だった相手に、急にしおらしくお礼を言うのも気恥ずかしい。

だが、いろいろ不満を感じる相手ではあるが、助けてくれた相手の窮地を見て見ぬフリするほど、

恩知らずでもなかった。

頭の中で考えを巡らした涼子は、澄ました表情で剛志に視線を戻した。

「冷静に考えると、美味しいお酒を堪能できるなら、悪くない話だと思って」

茶番に付き合う本当の理由を口にする代わりに、したたかな笑みを浮かべる。そんな涼子の表情を見て、剛志は納得した様子で頷いた。

「では契約成立だな。今日は思う存分、美味しい酒を楽しんでくれ」

そうして涼子の出した交換条件は、剛志に快諾されたのだった。

## 2 王子たちの企み

翌日。涼子は通勤中に空を見上げて、不思議な感覚に襲われた。

朝目覚めて、いつもどおりに身支度をして出勤する自分は、平凡な会社員だ。

昨夜、日本エネルギー産業の重責を担う男と食事をしたことも、そんな彼と奇妙な契約を交わしたことも、夏空の下で思い出してみると、その全てが嘘っぽく思えてくる。

「——っ！」

いつもより遅い足取りでぼんやり歩いていた涼子は、突然、肩と背中に強い衝撃を受けた。

それと同時に、鼻にかかる甘い声が聞こえてくる。

「柳原先輩」

体を捻<sup>ひね</sup>って確認すると、両肩にぶら下がるようにして掴まる佐倉の姿があった。

「……おはよう」

内心、朝から面倒な人に捕まったとげんなりしつつ、肩を大きく捻<sup>ひね</sup>って佐倉の手を解く。

手を払われた佐倉は、嬉々とした表情で涼子の前に回り込むと、予想どおりの質問を投げかけてきた。

「先輩、昨日のイケメン王子様は誰ですか？」

——絶対に聞かれると思った。

涼子は肩を落とし、面倒くさそうに息を吐く。

普段から時間に余裕を持って行動する涼子とは違い、いつもギリギリに出社する佐倉と偶然会うとは思えない。たぶんこの質問をするために、涼子を待ち伏せしていたのだろう。

それはそれで煩<sup>わづら</sup>わしいのだけど、空気を読まない佐倉に、オフィスで質問攻めにされるよりはまだマシかもしれない。

そう気持ちを立て直しながら、涼子は素っ気なく返す。

「友だちのお兄さん。飲み会で迷惑かけたから、そのお詫びの話をしたくて待ってただけよ」

言葉のニュアンスでは、飲んで迷惑をかけたのが剛志のように聞こえるが、そこはあえて勘違いしてもらおう。酔った勢いで、あの男と一夜を共にしたなんて言えるわけがない。

「じゃあ、お礼に食事をご馳走になったんですか？」

「まさか。少し話しただけよ」

「え〜ホントですかあ？」

甘えるような声で確認してくる佐倉に、涼子は涼しい顔で頷き、歩き出そうとした。でもそれを阻<sup>は</sup>むように、佐倉は再び涼子の前に回り込んできた。

「じゃあ、ちょうどいいから私に紹介してください」

「はい？」

なにがどうちようどいいのだろう。

不思議そうな顔をする涼子に、佐倉が微笑む。

「職場の先輩の紹介って、いろいろちようどよくないですか？ 無難だけど運命的だし、あの人も王子様っぽくて、ママもきつと喜びます」

意味がわからない。

これ以上相手をするのは面倒だから、どうか無視して会社に行けないだろうか。そんなことを真剣に考える涼子に、佐倉は言う。

「ママに、素敵な王子様と結婚してねって、お願いされているんです。だから、彼を私に紹介してください」

「はい？」

理解不可能。母親が望んでいるからって、思い描くままの人生が手に入ると何故思えるのだ。

どんなに可愛くても、ここまで会話の成立しない佐倉は、友だちにも紹介することを躊躇<sup>ためら</sup>う。ま

して、友だちの兄という微妙な立ち位置の人になど、進んで紹介できるわけがない。

「遠慮しとく」

きっぱり断って、佐倉の脇をすり抜ける。

背後で「ええっ」と、悲鳴のような声が聞こえてきたかと思うと、すぐに佐倉が追いかけてきた。「なんでそんな意地悪するんですか」

「意地悪って……」

逆に聞きたい。何故たいして親しくもない先輩に、当然のような顔をして、そんなことを頼めるのか。呆れる涼子の隣を歩く佐倉は、昨日の剛志を思い出しているのか、「両手を組んでうっとり虚空を見つめている。

「あの人、イケメンでリッチそう……」

「車好きで、無理して高い車に乗っているだけよ」

佐倉の妄想が加速する前に、今度は明確な嘘で話を遮った。

剛志の苗字や素性を知られると、流れで寿々花の素性まで知られてしまう可能性がある。

目立つことを嫌う寿々花は、ごく親しい人以外には自分の素性を隠しているので、佐倉に知られるわけにはいかない。

会話を終わらせるべく、歩調を速めて会社に向かう。そんな涼子に纏わり付くようにして、佐倉がしつこく話しかけてくる。

「どのくらいお金があるかは、付き合ってみて自分で確かめます。いくらイケメンでも、お金がな

い人はママ的にNGですから。だから先輩は、紹介だけしてくれればいいんです」

——この情熱と粘り強さを、是非とも仕事に回して欲しい。

そつと眉間を押さえた涼子は、不意に閃いた。

「佐倉さんが仕事を頑張ったら、考えてもいいわ」

それは、勉強が嫌いだっただ弟の拓海に使ったのと同じ手だ。

この粘り強さを仕事に向けてくれるのなら、涼子だってご褒美の一つくらい考えなくもない。

剛志には嫌がられるだろうけど、頑張って交渉くらいはしてみせよう。

そもそも、一瞬見ただけの剛志に、佐倉が本気で思いを寄せているとは思えない。

おそらくあの見た目から、自分に都合のいい理想の王子様像を描いているだけだろう。

だが希望を持つことで、佐倉が仕事にやる気を持ってくれるなら、それもよしだ。

「……」

「佐倉さんがやる気を見せてくれたら、私も紹介することを考える」

不満げな佐倉にそう微笑んで、涼子は足取り軽く会社へと向かった。



オフィスの席で業務をこなしていた剛志は、ノックもなくドアが開く気配にそつとため息を吐く。「ノックぐらいしてくださいよ」